

石川啄木試論Ⅱ —「不条理」の概念—

長崎 紘明

17才の時、石川啄木は中学を自ら退学した。これは、試験での不正行為事件が原因であった。彼は誇り高い選択をした。重要な事実、退学の前にすでに「絶望的な未来」を予期していたことである。彼の「誇り高い選択」と「絶望的な未来」は、後にアルベール・カミュが「不条理の意識」あるいは「魂の矛盾」として表現した概念と一致する。石川啄木の生涯には3回の「魂の矛盾」と3回の「脱出の試行」があった。

キーワード：石川啄木の意識、「不条理」の概念、郷愁と同族意識

I はじめに

石川啄木は17才（明治35年）で盛岡中学を退学した。このころの歌が盛岡中学の回覧雑誌にある¹⁾：

人けふをなやみそのまゝ、闇に入りぬ
運命のみ手の呪はしの神

これはカンニング事件に悩み、闇に入れたまま、自分が退学することになった運命を呪っている。

ささかにのそれより細き夢の糸
たどるもよしな詫びしれし今

深く反省し、詫びている今、なんとかならないものか、細い糸のような希望をつなぐ自分である。

日は落ちぬ雲はちぎれぬ月はいまだ
夕のそらのさながら吾は

日は落ちて暗くなっているのに、まだ月が出ないので黒々としている夕闇のような自分の境遇である。

世も人もろはじさては怨みまじ
理想のくものちぎれてし今

盛岡中学に入学した頃の理想は雲のようにちぎれて散ってしまった今となっては、世も人も呪ったり怨んだりせず、きれいに身を処したい。そしていよいよ単身上京する。そのころの日記²⁾の歌は：

神を仰ぎ道なる花にはぐれきよ
何地に向きて我れ歩むべき

神を仰いで歩けるような花道から、はぐれてしまった

自分は、今後どこへ向かって歩いていったら良いのだろうか？学校を離れてみると、まったく進路の定まらない自分である。

めざす方におごりあるべき世と思ひ
愛の帆章追ふて漕ぐ海

めざす詩歌の道には、おごりが感じられて、嫌な気分である、自分は愛の帆章をかかげて、この人生に旅立とう。

高き世の高きのぞみと思へばの
この旅立ちに辛かりし涙

17才の自分が文壇で名をあげることは、身の程知らずの高のぞみのように思えて辛いことである、自分があわれで涙がこぼれる。

想ひのせて想ひに胸の魂ひめて
世の海こぐか詩歌の小舟

想いの魂を胸に秘めて、荒波を小さな舟を漕ぐように短歌を作って生きてゆこうか。少年の果敢な挑戦とその心意気が美しくも恋人に向かって語られている、次の歌はさらに美化されている。

夕星の瞬き高き雲井より
落ちし光と吾恋ひむる（二首せつ子さまへ）

夕空に瞬く星のように輝いている君よ、雲の間から落ちてきた光のような君よ、私は君を恋しているよ。自分の現在の境遇では、唯一この愛の気持ちが生きてゆく力となるものであることよ。

若き子の盲目ぞすがる詩のみ袖
秋はかなげの手にもゆるさせし

年若き未熟な自分は、盲目の人が付き添う人の袖にすがるように、詩にすがって生きていることを、秋よゆるしてはくれまいか、生きてゆかしてくれよ。たった一人

の東京のはかない秋の一日を、暮らせるように、私の願いをかなえておくれ。この頃はイプセンの訳出に苦勞していた頃である。次の三首は「明星」³⁾に発表された。

ふとさめし瞳とちてぞ安かりし
夢のゆくへの闇をおもひぬ

ふと眠りからさめてはみたが、ふとんの中でまた目を閉じて、さっきの夢のつづきなどを思っていると、安らかである。起き上がってみたところで、あてもない一日である。

はても無うながれて水はかへりこず
神に終りのさばき拒むよ

果てもなく流れる水のように、盛岡中学での希望に満ちた日々は流れ去ってもう決してもどつてこない。神よ私の人生はこのまま終わってしまうのか、こんな終わり方は嫌ですよ。生活苦が切迫し、病んでいた頃、自分はこのまま、東京で一人死んでしまうかもしれないと思っている。

岩間よちて天のよそほひ地のひびき
朝のひかりの陸奥を見る

東北の盛岡中学や、郷里の渋民村が恋しい。岩をよじ昇って、天空に上り、地の響くような東北地帯の全貌が朝の光に見えるようだ。これは切実なホームシックを美しく画いたものである、次の一首はさらに切迫した感じである。

地に下りて秋の霜ふむ蝶や身や
かくて寒さのたへ難き世や

地に下りてみれば、秋も終り冬になっている。霜を踏む蝶のように、わが身にとっても、寒くて生きてゆけないほど、辛く耐え難い世の中です。この歌を最後に、啄木の17才の挑戦は挫折し、故郷の渋民村に帰る。

II 「不条理」の意識

……まったく教訓的だと思えるひとつの明々白々たる事実がある。人間は常に自分が真実と認めたものにとりこになってしまうということだ。なにかひとたび真実と認めてしまうと、人間はなかなかそれから自由になれない。なにか真実と認めたのだから、すこしはそれに相応する苦勞をしなければいけない。不条理を意識するにいたった人間は、いつまでも不条理に縛りつけられる。希望をもたず、しかもそのことを意識している人間は、もはや、未来からしめだされている。これは理の当然だ。だがまた、かれがみずから創造した宇宙から逃げだそうと努力するのも、当然のことなのである。

……経験の中から、自己の無力の告白以外になにひと

つ見いださず、欲求をみたくすようななんらかの原理を導きだすための口実も、ひとつも見いださなかったのだ。
(シーシュポスの神話)⁴⁾

17才の時に、石川啄木は「自分が真実と認めたものにとりこになってしまった」と解釈ができるだろう。短歌によって自己を表出し、真なるもの、美なるもの、善なるものを画きだすことにとりこになってしまった。その束縛の中で、「未来からしめだされている自分」を意識した。全く「希望のない」ことを意識し、「自己の無力を告白し続ける」。17才の啄木が偉大な精神に行きついていたと、筆者は考える。カミュが30年後に表現した「偉大な精神」としての「不条理の意識」と、石川啄木の意識が本項の主題である。カミュが論証したように、「世界」と「自分」と「不条理」の三項は現代人の意識を構成する主要な項目である。カミュが言う「世界」とは、人間が各自、「自ら創造した世界であり、周囲の環境であり、風景としての人間であり、関係としての他人である」。それは「かれがひとたび真実と認めてしまうと、なかなかそれから自由になれない世界」であり、「それから逃げだそうと努力するのも当然な世界」である。つまり、自らの頭脳の中に画かれる認識であり、感覚であるからだ。石川啄木は「退学する決意」に真実を感じながら、同時にその真実の重さも実感し、既に「退学の前」に「その決意から逃げだしたい」心境にあった。にもかかわらず「後悔」とは裏腹に、事態は進行し、「絶望」的な未来を選択した。

……「不条理な精神」は諦めて虚像に身を委ねるよりは、むしろ、恐れることなくキルケゴールの答え「絶望」を採るほうを選ぶ。すべてを十分に考えたとき、断固たる魂は、つねに「絶望」という答えを受け入れるであろう。……これは思考が思考自体を否定し、自己を乗り越えて、この否定を行うもの自体の中に向かおうとする動きを、便宜的にこう名づけたまでにすぎない。……思考することは、なによりもまず、ひとつの世界をつくることだ(あるいは、結局同じことになるが、自分の世界を限定することだ。)それは人間と経験を引き離している根源的な食い違いから出発して、人間の郷愁にのっとった協調の場、耐えがたい背反状態の解消が可能になるような、理性的説明に固められた宇宙を見いだそうとすることだ。

(シーシュポスの神話)⁵⁾

石川啄木において、「絶望」の未来を受け入れることは、「思考が思考自体を否定して、自己を乗り越えたところの、否定を行うもの自体のなかへ向かおうとする動き」があったか?この点はカミュの論証のなかでも最も重要な部分であった。これは「思考」の定義でもある。つまり「思考」は「自らの世界をつくり、限定すること」である。そして、「思考」が「人間の郷愁にのっとった協調の場」を見出そうとすることで、「根源的な食い違い」を一挙に「解消」するような可能性を見つけること

である。石川啄木がこのような「郷愁の場」を見出したことは、明らかである。石川啄木は「郷里」という概念と情念にその「場」を見つけ、「郷里という言葉空間」で、さまざまな「人間の根源的な食い違い。」を表現した。それには5、6年の年月が必要だった。「一握の砂」⁹⁾に集められた短歌を参照すれば、「人間の経験の空しさ」「絶望を受け入れる人々」「人間とその経験の食い違い」「未来から閉め出された人々」「不条理の意識」、あるいは「根源的な食い違いそのもの」「人間の郷愁そのもの」などが、見出される。

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
じっと手を見る

手の爪についたインクなど、ごしごし洗っていると、なかなか汚れが落ちない。洗いながら考えることは、あるときは、安らぎのようなものであり、あるときは苛立ちのようなものである。じっと指先を見ていると、いつになったら生活が楽になるのか?と思う。

何もかも行末の事みゆるごとき
このかなしみは
拭ひあへずも

家庭内の不和で、母と妻は疲れ果て、妻は書き置きをして実家に戻ってしまった。友人に頼んで帰宅を求めているが、さりとてこの不和を自分はどうすることも、できなからう。暗澹とした行く末がみえるようだ。

水晶の玉をよるこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ

水晶の玉の不思議な錯視によるこび、あれこれ水晶の玉に映る像を見ていると、何やら異次元のような気分になる。この喜びは一体、何だろうか?

邦人の顔たへがたく卑しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

何か熱心に洋書を読みふけて、外国の生活や文化に感銘をうけたにちがいない。邦人の顔が卑しく見えて、見るに耐え難い。今日は一日家にこもっていよう。新しい時代と新しい文明に、輝くような顔が見たい。

この次の休日に一日寝てみむと
思ひすごしぬ
三年このかた

この次の休日は、一日中寝ていようと思ひながら、追われているように、先取りするように仕事をしてきた

日々が思い返される。仕事の面白さや充実感とは裏腹に、心身の疲労がたまっている。

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほるてふ
薬はなきか

うす緑色の液体で、それを飲めばたちどころに身体が水のごとく、透明になるような、心身をすっきりさせるような薬はないだろうか。あるわけないけど。

人間のつかはぬ言葉
ひょっとして
われのみ知れるごとく思ふ日

言語の魔力、言語でもたらされるある境地と、その満足感のある空間と時間、ひょっとしてこの空間は超人間的な次元かもしれぬ。もしかしたら超越的な時空を、自分だけが味わったのかもしれない。これは一種の悟りであり、不条理の意識が唯一、安らぎを憶えるような、全ての不条理の事柄が、一瞬にして理解できる心境のような、そんな状態と思われる。

あたらしき心もとめて
名もしらぬ
街など今日もさまよひて来ぬ

歌人は西行法師をはじめ、芭蕉、また同時代の若山牧水など、多くの旅をしている。歌の取材でもある。歌人の放浪は、新鮮な感覚を求め、純粋な姿や根源的な感動に向けて、日常の倦怠や卑俗から逃れる行動だと思われる。

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひきて
妻としたしむ

同時代の歌人達の友をさしているのだろう。若山牧水、前田夕暮、高村碎雨、北原白秋、佐々木信綱、等誰もが後世に作品を残した人々である。友人達の全てが立派な業績を上げている。顧みて自分は力が足りないようだ。花を買って帰り、妻と二人、花を賞でて安らぎの時間をもったのだろう。

人みなが家を持つてふかなしきよ
墓に入るごとく
かへりて眠る

街をさまよって夜も更ける。誰もが家路に急ぎ、街は誰もが居なくなって、家々は次々と明かりが消える。自分も家に帰って寝るが、寝ることは墓に入って死ぬことのようなのだ。明朝に目が覚めないとは考えもしないけど。誰しものが、家庭をもち、寝る所を持つということには、

さまざまな悲しみが凝集されているようだ。

人といふ人のところに
一人づつ囚人がいて
うめくかなしさ

人は誰しも、心の中に罪の意識があつたり、罪の思い出がある。人には知られたくない罪人が、人の心の中で時々、うめくように、自らの罪に苦しむようだ。罪をもって生きてゆかねばならぬことは、誰にとっても、悲しいことである。

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

人から物を盗むことばかりではない。公の物を盗むこと。人の資料を盗むこと。人の言葉を盗むこと。人の考案したものを盗むこと。情報を盗むこと。技術の奥義を盗むこと。銀行強盗をしたらどうなるのか?と考えたのかもしれない。人の世では、盗むことに慣れている。それを悪いと思えない日の自分の心は、悲しい。しかし、誰もがそう思えば、あらゆる犯罪はなくなるはずだが、今までも、これからも、あらゆる犯罪が続けられてゆく。罪を犯せば、かくれ家はないのだ。誰しも、心の中に囚人を抱いているように。

わが抱く思想はすべて
金なきに因するごとし
秋の風吹く

新聞に評論を連載している。沢山の短歌を作っている。他人の歌を評価している。それらの思想のすべてが、金のない貧困な状態から発せられているもののように思える。もし貧困でなければ、こんな歌を作ったり、あんな記事を書いたりするだろうか?秋の風が吹く季節となった。

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

自我に目ざめた頃、自分の名を呼んで、自分の存在をはじめて意識した頃、自分の存在をもう一人の自分が知った頃、あれは14才だったろうか?子供心が、なつかしい。

ふるさとの訛なつかし
駐車場の人ごみの中に
それを聴きにゆく

上野駅に行ったにちがいない。郷里の言葉で話す人達に親しみを感じ、わけもなく胸はずみ、身近に感じられ

て、郷里の訛で喋っている人達が皆、知人のように思えて近くに寄っていきたくなる心境である。何か根源的な同族意識と結びつくものがある。

うすのろの兄と
不具の父もてる三太はかなし
夜も書読む

知恵おくれの兄と、不具の父をもつ、そんな家庭の三太は夜も書を読んで勉強していた。あの子は今頃どうしているだろうか?洪民村の教員時代の教え子であろう。三太は運命としての家族を受け入れて、共に生きている状況である。

わが従兄
野山の狩に飽きし後
酒のみ家うり病みて死にしか

従兄の一生を短い行間に表現している。こんな生涯もあるかと思う。人から見れば、こんな風に見える生涯も本人にとってみれば、言語に尽くせないほどの人生であろう。

Ⅲ おわりに

「不条理」の意識においては、二律背反状態を抜け出して、一挙に解消するための「試行」や「飛躍」がある。17才の少年、石川啄木は「退学」をひかえて、引き裂かれるような現実の中で、自らの意識を高められるだけ高めて、誇りある「決意」をしていた。同様に自らの胸の内を「堀合節子」を高められるだけ、高めて神格化し、美化した。これが石川啄木の「第1回目の不条理からの脱出」の試みであった。これは明治20年、18才の北村門太郎(透谷)が「石坂ミナ」に抱いた心境と全く同じである。もしかしたら、多くの少年達は、このようにして、人生の「第1回目の苦悩」を一挙に解消するものなのかもしれない。

石川啄木の「第2回目の不条理からの脱出」は、北海道での新聞記者生活をふり捨てて上京したときである。この時は、「小説を書く」という決意であった。それまでの啄木は、短歌と評論で自らの芸術性を表出していたが、「小説」のもつ芸術性と、その威力に感嘆し、自らも「小説」的な空間を作り出そうとした。この試みによって、家庭的事情も一挙に解決しようと思っていた。生活状態も一段と良くなるはずであった。その意図はかなえられなかった。そして一挙に、新しい形の短歌を噴出させて、「一握の砂」を発表した。同じ年に前田夕暮は「収獲」を、若山牧水は「別離」を発表して、短歌の世界に新時代をもたらした。しかしこの年、「大逆事件」がおきて、啄木の運命は急変することになるのだが。そして第3回目の「不条理」と立ち向かう。

文 献

- 1) 石川啄木 (1901) 盛岡中学回覧雑誌. 啄木歌集, 岩波文庫, 221. 1984
- 2) 石川啄木 (1902) 日記. 啄木歌集, 岩波文庫, 216-223. 1984
- 3) 石川啄木 (1902) 第三「明星」七. 啄木歌集, 岩波文庫, 223. 1984
- 4) アルベール カミュ (1942) 清水徹訳 不条理な論証. シーシュポスの神話. 新潮文庫, 1-94. 1987
- 5) アルベール カミュ (1942) 清水徹訳 不条理な創造. シーシュポスの神話. 新潮文庫, 134-166. 1987
- 6) 石川啄木 (1910) 一握の砂. 啄木歌集, 岩波文庫, 3-156. 1984

ABSTRACT

An Essay on Ishikawa-Takuboku Ⅱ
—The Concept of “Absurd Consciousness”—

Hiroaki NAGASAKI

At his seventeen, Takuboku Ishikawa withdrew from high school causing troubles of cheating in examination with his own decision. He made his choice with his pride. The important fact was that he had already expected a “despair future” before his withdrawal from school. His “proud choice” and “despair future” coincided with the concept—“Absurd consciousness”, or spiritual conflict—described later by Albert Camus in 1930s. We have a hypothesis that T. Ishikawa would have the great “Absurd” mind. T. Ishikawa tried to escape from his unbearable “Absurd Consciousness” in the way of the “Absurd thinking”, or a magic breakthrough as suggested by Camus in order to get “Absurd Liberty”. T. Ishikawa had tried his 3 times’ “Absurd Escape” in his life. We will discuss how T. Ishikawa got the great “Absurd” mind.

Human Science and Fundamentals of Nursing